

Salon

ゴッホに魅せられて

ゴッホ研究者

正田 倫顕さん



Profile

しおだ ともあき／1977年、神戸市生まれ。東京大学教養学部卒業。ベルギー・ルーヴン大学に留学。ヨーロッパにおいて、ゴッホに関するフィールドワークに従事する。ゴッホの暮らした土地、描いた場所、関連美術館などを隈なく調査する。ゴッホに関する執筆、講演多数。著書に『ゴッホと〈聖なるもの〉』(新教出版社)など。
※佐野市赤見温泉一乃館に逗留・執筆中にインタビュー。

きっかけは『アルルの跳ね橋』

正田さんは第一線でご活躍のゴッホ研究者ですが、世界中に大勢の画家がいる中で、なぜゴッホを選んだのですか？

正田 私の場合、ゴッホを選んだというよりは、ゴッホにつかまれたと言った方がよいかかもしれません。高校生までは、ゴッホと言わざりとも「名前は知っている」という程度。特に関心があつたわけではないのです。大学に入つてから、図書館でゴッホの画集を何気なく見ていました。その中に『アルルの跳ね橋』という絵があつて、その美しさに心を打たれてしましました。なぜだか分かりませんが、ゴッホに惹きつけられてしまったのです。大學入学時は理系だったのですが、作品を見、彼の人生を知るうちに、ゴッホの研究をしたいと思うようになりました。絵が何を訴えようとしているのか、その真実をもつと知りたい。そういう想いで、勉強を始めたのです。

正田 きっかけは『跳ね橋』だった？
正田 はい。静かで美しい絵ですね。しかしながら多くの絵を見ていくと、渦を巻いていたり、訊の分からぬエネルギーがみなぎっています。これらの表現の真相に迫りたい。そして彼の芸術世界に深く分け入りたい。そう思って、まずは卒業論文や修士論文でゴッホをテーマにしました。

正田 ゴッホは世界的に有名な画家なので、代表作は知っているという人が多いと思います。でも絵に見覚えがあるというくらいで、それほど深い見方には至つていませんよね。

まず日本でゴッホというと、浮世絵との関係が注目されます。やはりジャポニズムにおいて、ゴッホに関するフィールドワークに従事する。ゴッホの暮らした土地、描いた場所、関連美術館などを隈なく調査する。ゴッホに関する執筆、講演多数。著書に『ゴッホと〈聖なるもの〉』(新教出版社)など。
※佐野市赤見温泉一乃館に逗留・執筆中にインタビュー。

正田 彼は牧師の家に生まれ、キリスト教の世界で育つてきました。そして自分も父親と同じように、牧師になりたかったのです。それで戦苦闘しますが、結局形骸化したキリスト教に幻滅してしまう。そういう背景を見ておかないと、ゴッホの絵の深い部分はつかみにくい。

ゴッホの場合、制度としての教会ではなくて、キリスト教の根本にあった生々しい部分が最も重要でした。つまりイエスがどう行動して、どんなことを言ったのかということです。そこを探究した結果、自分もイエスを真似して、イエスのように生きようとしたところがあるのです。実際、ベルギーの炭鉱地帯に行って、貧しい坑夫たちと一緒に暮らしたりしています。オランダのキリスト教には日本人に馴染みのない宗派もたくさんあります。ゴッホは宗派ではなく純粹にイエス



《アルルの跳ね橋》

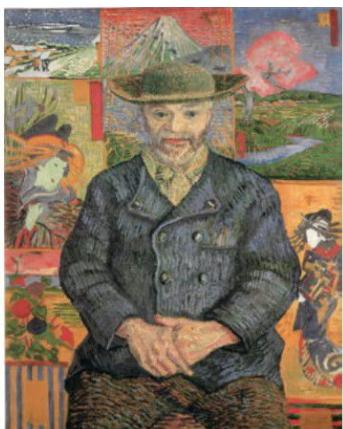
スを追求していったのですね。そのことがゴッホという人間の一一番の核心にあったと思います。

ゴッホの絵が語る

正田さんはこれまでゴッホの作品を見続けているわけですが、それぞの絵をじっと見ていると「この絵は何を語っているのか」ということが分かってくるのですか?



《ひまわり》



《タンギー爺さん》

正田 ゴッホという画家に特徴的なことは、絵だけではなく、手紙も残していることです。彼が書いた手紙は800通以上あり、そこにはあらゆる感情、生活のありさま、思考、宗教観、芸術観が投入されています。これらの手紙を読むことで、絵に対する理解を深めることもできます。ただ絵と手紙にはズレがあるので、手紙に頼りすぎると足をすくわれることにもなりかねません。単純に絵と手紙を結びつけて、理解した気にならないようにしなければなりません。

たとえば手紙に日本美術への言及があるでも、実際にゴッホの絵を見ると浮世絵の影響以上のものがある。なんとも言えない不気味なエネルギーがあふれています。なまでは絵をじっくり見て、ゴッホの表現を感じ取る。そして彼が意図せずに表現したものまで見抜く力が必要だと思います。

なるほど。ゴッホの想いと作品の間にズレもあるのですね?

正田 そうです。たとえばこの大きなサイズの《ひまわり》。これはゴッホがパリに出てきて二年目に描いた作品です。手紙からは、自分を画家として売り出し、お金を稼ぎたいという動機で描いたことが推察されます。当時のパリでは、ひまわりは人気の主題でした。レストランのショーウィンドウに飾られていたり、壁紙の柄としても一般の人には好まれたりしました。それでゴッホも軽い気持ちで描き始めたと思われるのですが、それに

しても幸福感を味わえるような絵です。しかしゴッホの《ひまわり》はおどろおどろしいものが前面に出てきています。この絵で描かれたのは、単に明るくて元気なひまわりなどではない。どの花も枯れかかっています。切り口が強調され、赤い血のようなタツチまで見られます。にもかかわらず背景には伸びていくような線がたくさん描かれ、万物にみなぎるエネルギーを感じさせるのです。つまりひまわりはもうすぐ土に還っていきはざなのに、死をこえたいのちに轟々と貫かれています。生と死が重なり合ったような、矛盾した表現が認められるのです。

浮世絵からの影響

正田 先ほどの浮世絵の話ですが、ゴッホは浮世絵のどんなところに惹かれたのでしょうか。

正田 三点ほどあると思います。一つは浮世絵の構図ですね。それまでの西洋絵画にはない切り取り方。たとえば遠近感を極端に強調し、画面を木の幹が横切っていたりする。あるいは地面の一部をクローズアップしたりする。次に色の使い方。版画ですので、明るい色面をべつたりと塗っています。そして三つ目はモチーフ、何を描くかということです。

正田 ゴッホの作品の中には、浮世絵を模写したものもいくつかありますよね。自然の中の昆虫とか草木とか身近に見られるものが多く、ヨーロッパ絵画ではあまり扱われてこなかつた主題です。構図、色、主題に関する影響を受けています。

正田 そうですね。《タンギー爺さん》という作品の背景には、浮世絵が何点も描かれていました。そこでゴッホも軽い気持ちで描き始めたと思われるのですが、それに

してはこの絵は不気味さが際立っています。歌川広重の《亀戸梅屋舗》、《大はしあたけの夕立》も模写しています。もつともゴッホは絵の周りに漢字を並べるなど、独自の工夫をしていますが、浮世絵の影響を受けた画家はほかにいるのですか?

正田 ゴッホの仲間のゴーギャンやベルナールがそうでした。彼らは日本美術の影響を受けて、総合主義という流派をつくっています。総合主義は印象主義への反動から、平坦な色面と輪郭線を強調しました。モチーフを単純化し、輪郭線をまるでステンドグラスの鉛の線のように用いたのです。ゴーギャンの《説教のあと》の幻影(ヤコブと天使の闘い)という作品には、木の幹が画面を横切る大胆な構図や大きな色面を使つた描き方が認められます。モネも自分の奥さんに日本の着物を着せて扇をもたせて描いています。当時のヨーロッパでは、浮世絵がブームになっていました。

正田 オランダのゴッホ美術館には、相当数の浮世絵が収蔵されているんでしょう?

正田 はい。ゴッホはベルギーの港町・アントワーテープで浮世絵と出会いました。日本から来た輸入品の中に浮世絵がたくさんあって、収集を始めたのですね。それらは今、ゴッホ美術館に収められています。

正田 当時は日本から送られた陶磁器などの包装紙として使われていたのだそうですね。

正田 そうです。日本ではありふれたものとして扱われていましたが、ヨーロッパの人には珍しかったので、コレクションの対象になりました。

正田 そうした流行の中で、ゴッホも浮世絵の影響を受けたことは確かです。実際、《寝室》などは光だけで影のない描き方をしていて、浮世絵の技法と共にしています。とはいえて、ゴッホの表現はそれすべてかというと、そうでない。まだまだ奥深い領域があります。表

